

第二次世界大戦の日本の行動（その1）

大戦概要

01602334 松山大学 湊 晋平 MINATO Shimpei

まえがき

戦争の研究は歴史学、政治学、軍事学の領域で採り上げるべきもので、経営学の対象として適切ではないとの意見もあるが、ORの出発点はもともと戦争の研究から出発したものであり、戦略・戦術の研究も、企業行動の分析も本来「システムの競争」に於て、システムの主体がいかに合理的に適切に行動するかから出発している。戦争の経営学的研究の先例として「失敗の本質」

(1)があるが、筆者はこれから約10回にわたり第2次大戦の日本が実施した戦略、戦術、行動を経営学的立場から分析する。

第2次大戦の日本の戦争は、一般には太平洋戦争、もしくは大東亜戦争とよばれている。しかし、この戦争は日、独、伊の枢軸側と米、英、ソ連およびシナの連合側とが地球の全領域に於て戦闘を行い、しかも各地域の戦勢が深く関連し合っていたので第2次大戦の呼称が適切であると考えられる。

1、地域の区分

アジア・太平洋地域、大西洋・地中海地域、東欧地域に分けて、日本が関連したアジア・太平洋地域を中心に考察する。

1.1 アジア・太平洋地域

戦争は主に日本海軍が優勢な米海・空軍を相手に苦闘し、陸軍の主力はアジア大陸に無為に存在を余儀なくされる戦略的失敗、資源自給のあやまりを犯して敗北した。

1.2 大西洋・地中海地域

当初、欧大陸では独が仏を撃破し優勢であったが、大西洋の海洋補給線があり、北アフリカで連合軍が勝ち伊が崩壊する。やがて連合軍の北仏上陸(第二戦線)実現で独は東西の挟撃に耐えられず敗北する。

1.3 東欧地域

独の奇襲にソ連は大きく後退したが、冬將軍の到来と共によく持ちこたえ、スターリングラードの攻防が逆転に連なって、以後独は善戦しながら退却を重ねベルリン陥落にいたった。

2、戦勢経過

第二次大戦は4つの時期に大別できる。

2.1 日本の参戦前期および決戦期

(1939, 9~1941, 12 ; 1941, 12~1942, 5)

1939年の独のポーランド侵入以来、日本の参戦の1941年12月迄の準備期は主に枢軸の優勢に推移した。すなわち1940年独のマジノ線突破に続くパリ陥落(ダンケルク撤退)、仏降伏があった。しかし独は英本土の制空権獲得に失敗し、英本土上陸をあきらめ、攻撃をソ連に向けた。

日本は欧州の独の勝利を見て「パスに遅れるな」と、日独伊の三国同盟を結んだが、この結果日米の国交が確立に失敗し、遂に日米戦争に突入した。緒戦に於いて日本は攻勢を取り成功し、戦線を急激に拡大したが、やがて国力の限界に到達した。

2.2 決戦期(1942, 6~1943, 4)

日本はミッドウェイ海戦につまずき、やがてソロモン諸島での日米海軍の激戦が続いたが、国力の限界と作戦のまずさから勝利を得ることができず撤退した。山本G.F.長官の戦死は日本の敗北を象徴している。

独も北ア及び東部戦線に攻勢をとったが、東部戦線では作戦のまずさから勝利を逸し、スターリングラードの悲劇を迎えた。北阿は伊の非力から地中海の制海権を逸し、敗退した。伊のムッソリーニは失脚し早々に降伏した。

2.3 防戦期(1943, 5~1944, 6)

日本は国力の衰退からじりじりと押され、ついにマリアナ決戦を迎え敗れた。この期間に前線の苦闘に対し、東条首相以下トップの無策、参謀本部の無能さは厳しく咎められねばならない。

欧州でも連合軍のノルマンディーの上陸が独の必死の防戦にかかわらず成功した。これと並行してソ連も攻勢を採り、独は善戦しながらも後退した。

2.4 敗戦期(1944, 7~1945, 8)

勝利の見通しのなくなったなかで、日独はよく健闘した。日本の神風特攻隊や硫黄島、沖縄の玉砕は称えられるべきものである。反面、日本政府のトップへの終戦への決断の時期のまずさは外交・情報能力の欠如として今後も深く検討すべき事項である。

参考文献

- 1) 戸部良一等, 「失敗の本質」, 中公文庫, (1991)
- 2) 奥宮正武, 「太平洋戦史の読み方」, 東洋経済新報社, (1993)
- 3) 「杉山メモ」上下, 原書房, (1967) 他

